
雨上がりの黄昏に

夕原あかね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨上がりの黄昏に

【Nコード】

N0782E

【作者名】

夕原あかね

【あらすじ】

不登校の中学生麻衣原直輝と、宇宙人あるいは超能力者あるいは（以下略）柊との、独断と偏見を含んだ、淡々とした日常を書いたもの。

—手紙—

誰がこれを読んでいるのだろうか。

こんなふざけた内容の手紙を。

しかし、手紙というのは読み手がいるからこそ手紙。

当然読んでいるものがいた。

そいつにどんな感情が巡ったかは、別に知らなくても良いことだ。知らなくても良いことというのはあちこちに溢れかえっている。

知ったあとはそれをどう調理しておいしく仕立て上げていくか、それこそが有効な使い道だろう。

だから、手紙の内容なんてのも、なんだか知らなくて良いような気がしないでもない。

しかし、それではこれ自体の存在も知らなくて良いことなので、とりあえず、そのふざけた手紙の内容をここに記しておく。

前略

たびに出ます。

どうぞ捜さないで下さいな。

後略

五月九日（前書き）

これは主人公の主に自宅で繰り広げられる日常を淡々と書いたものです。

ストーリーの進行より、どちらかというとメッセージが主体になっております。

また、私自身の独断や偏見がかなり入っております。

以上のことに同意できない方は観覧を控えることをおすすめします。

五月九日

五月上旬だというのに、ここ最近は梅雨のまっただ中のようなだった。特に今日の雨は、若葉が生い茂る桜の大木もずいぶん小さくしぼんで見える。辺りを見回してもこの雨の下を歩いている人影は見あたらず、たまに通る車の水飛沫と、バツクの単調な雨音だけが僕の耳に入ってくる。なんとも退屈だ。

ふと、僕は白い半透明の傘越しに人の姿を見た。この雨の中傘も差しておらず、服装も―その時はうまく言葉で言い表せなかったが―風変わりだった。おまけに身長からすると、相手はせいぜい小学校低学年男児、ぐらいいしか見えなかった。(そのくせ、小学生という雰囲気はこちらにはどうも伝わってこなかった)前方からゆっくり、おまけによるめいた足取りで、見ているこつちまで不安な歩き方だ。

僕の第六感が察した。―関わらない方がいい。さっさとすれ違って、何事もなく通り過ぎてしまった方がいい。いや、通り過ぎてしまわなければならない。僕はそう心にいつけた。

僕は急に早足になって人影の方に歩き出す。まるでそれに反応したかのように相手の足取りが余計不安定になってきたものだから、僕の心臓は高鳴った。相手との間合いが二メートルほどになる。一メートルになる。ついに肩と肩がすれ違う。その時―僕の顔に笑みが浮かぶ―相手の上半身が急に沈み、とても軽くぱたんと前方へたおれた。

僕は足を止め、倒れた彼の様子を見たが、どう待っても自力で起き上がってくる様子はなかった。当然周囲には人っ子一人来る気配はない。雨の中、傘も差さず道端で倒れた少年を放っておく。僕のどこかがちくりと痛んだ。

僕は小さく、深い溜息をつく。しょうがない、これも運命ってやつなのかもしれない。とりあえず僕は、その運命とやらを呪った。

やけに軽い彼の体を担ぐと、そのまま自宅へと向かって行った。

自宅にたどり着いた僕『達』は、どちらも全身ずぶ濡れになっていた。とりあえず体を拭き、（相変わらず気を失ったままの）彼にはその辺からもってきた毛布を被せて椅子に座らせ、彼の分と僕の分、とりあえず二人分の紅茶をわかすことにした。（僕は紅茶よりコーヒーの方が好きだが、相手の年齢を考えるとやむを得ない）

僕は今一度、彼の格好をながめてみた。端が少しボロボロの、ゆったりとした白いＴシャツのようなものに、同色のズボン。それと、なにやら半透明の上着のようなもの（と言っていいのだろうか。むしろ布と言った方が良さのかもしれないけれど、詳しいことは今の僕には分からない）。顔つきはうつむいていて僕からはよく分からない。しかし、しばらく気がつく様子が無さそうなので、とりあえず紅茶だけ置いて自室へと戻った。

時計の長針がいったい何回一周しただろうか。気がつく窓の外は真っ暗になっていた。……自分にはあまり関係のないことだが。二階へ数学の問題集を取りに行こうとしたとき、僕はすっかり忘れていた、雨の中倒れた彼のことを思い出した。

……まずい！　ずっとほったらかしたままだ！

大慌てで階段を駆け下りると、驚いたことに彼はまだ起きていないようだった。

「いったいいつになったら目を覚ますんだか……」

言いかけたときだ。彼の手がぴくつ、と動いた。それに続いて両足指と続く。まるで耳をぴくぴく動かす猫みたいだ。と、彼は上体を起こし、半開きな目で僕の方を見た。

彼は、全くと言っていいほど身長に比例した雰囲気を持っていなかった。もつと何か―不思議な雰囲気を持っているような…（とりあえず今言えることは、彼は小学生ではない）僕が彼の瞳に違和感を感じたと同時に、彼は僕のほほに右手の人差し指を押し当てた。

「!？」

驚く間もなく、彼の瞳に光が宿る。彼は不思議に辺りをきよるきよる見回すが、すぐに僕の方に向き直って言った。

「そっか。なるほど。ヨーかった!! 無事にたどり着けたみたいで!!!」

突然おどけたようにきやあきやあとはしゃぎ出す彼に、僕は呆氣にとらわれてしまった。

「ふう。で、君は何？」

「え? ……麻衣原直輝^{まいはらなおき}」

「あ、名前……まあそれでいいか。どーせ人間なんだろうし!」

なんだこいつは。意味が分からない。悪く言えば、なんか頭のネジが一本抜けている。

「ところで、お前の名前は何なんだよ」

意味不明なこいつの態度にいらいらしながら、僕は自分が今精一杯言えることを言った。

「名前? そーだなあ………」

急に真剣な顔つきになったそいつに、僕は肩の力が入る。が、そいつは想像とは真逆の方向を突っ走っていった。

「宇宙人あるいは未来人あるいは超能力者あるいは異星人あるいは創造主あるいは神あるいは創造あるいは伝説あるいはそれ以外のなものでもないもの。ま、正直なんでも良いけど、名前はいるよね^{なまえ}、とでもしておくか」

これが、このどこかが壊れてるやつ——柊との、少し変わった日常への幕開けだった。

五月二十五日

朝、僕はいつものように起床した。

といつても、時計の短針はもう真上近くを差しているから、どちらかというと昼に起きたという感じだけだ。

しかしどうってことはない。これが僕の日常だから。

長寝したせいでもう頭はすっかり冴えていた。とりあえずさつさと着替えて、朝食兼昼食を摂りに二階へと駆け下りる。これがいつもの変わらない日常。もう全くもって平凡な生活を続けてきた。少し前までは。

リビングのドアを開けると、そこにはもうすでに先客がいた。

外見年齢小学生のそいつ。頭は寝癖でぼさぼさ。服は少し前の僕のお古を着てるせいで、だらしなく肩がだらんと見えている。そんなやつが大欠伸をしつつぼーっとテレビを見ていた。

「あ、おはようーっ。随分遅かったねえ」

柊。

こいつが来てから、地味に僕の人生は変わっちゃったのかも……

「あ、パンがもう無い。柊。僕の分残しておけって言っただろ」

「えー？ だつてしょうがないんだもん。ひろが全く起きてこないものだから、僕さんはおなかへってさああ」

やれやれ。

僕は溜息をついた。しょうがない、今日も朝食はコーヒーか。

僕がコーヒーを入れ始めると、すかさず、それを察した柊が突っこむ。

「あ、ひろ。どうせなら僕さんの分の紅茶もいれてくれないかなあ
あ？」

「……いい加減自分でいれろよ。やり方分かってるんだろ？」
そうは言ったものの、僕には、こいつの頼み事を自分自身がやった記憶がないので、仕方なく紅茶もわかすことにした。

「だいたい、こいつは生活からしてなんかむちゃくちゃだった。」

日付が変わってから寝る僕と同時刻に寝てるくせに、起床は必ず朝七時。しばらく居間でごろごろしていると思うと、いつのまにかふらつといなくなる。で、それから夜にかけてまでずーつとこない。僕はほとんどあいつには関わっていかない。ただ、向こうからは頻繁に関わってくるから、関わらないわけにはいかないという、正直嫌なシステムができてしまった。

もっというとな、この柵という存在自体が僕は嫌、というより不気味だ。何日か同居してて分かったことは、こいつは何考えているか分からないのだ。どうしてここに来たのか、目的は何なのか、僕にはさっぱり分からない。そんなやつがここにいる理由は、紛れもなく向こうが無理矢理ここに住まわせることを望んできたからなんだけど。

「……ひろっ。どしたの？ さっきから難しい顔しててっ。もうコーヒーできてるよ」

「あ、忘れてた」

僕はさっさとコーヒーを飲み干してしまった。しかしこいつ。なんだか僕のタイマーと化してきてるなこりゃ。

「……ところでひろ。前々から気になっていたんだけどさああ」

「…なんだよ」

「………なんでひろは学校行ってないの？」

「………！」

ついにこの質問が来てしまったか………

「別に、行かなきゃならないってものじゃないだろ。それに、僕は学校には向いてないの」

とりあえず、前々から来るときに備えて準備した適当な答えを出してみる。

「…あつそ。まあべつに良いけどねええ。ひろの勝手だし」

「…なんか珍しくあつさりとした返答だな。お前らしくない」

「だあーって、別に人の生き方には興味ないもん。聞いてみただけ。どうぞどうぞ、勝手に生きて、勝手に壊れて、勝手に死んじゃいなよおお」

「……………どうも貶しているように聞こえるんですけど」

「いやいやいや、貶すもなにも、そんなのないから。正しいも間違ってるもだめもオツケーもなんにもないからさ。自分がそれで良いと思ってる方へ突っ走って好きなようにやって自分が満足すれば良いんじゃないのおお？ ま、それでうまくいく確率が高いかどうかまではさすがにわかんないけどねええ」

「……………要は学校行くも行かないも自分の勝手だから好きにしろってことか？」

「んー、ま、そんなとこかな。そもそもがっこうがよくここまで続いてきたことを、僕は拍手したいな。みんな思ってることばらばらなのに、それをよくそろえられるんだもん。やっぱにんげんってすごいなあああ」

……………相変わらずこいつはどっかいかれてる。いかれてないとしたら、柊は人間じゃないってことだろうか。そんなことあるのか？

すっかりスイッチが入ってしまった柊をおいて、僕はそのまま自室に戻った。

半開きのクローゼットの隙間から、もう随分着ていない制服が見える。

僕は、溜息をつくと、しっかりとクローゼットを締め直して、いつもどおり勉強をすることにした。

時計の短針は、右へ傾き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0782e/>

雨上がりの黄昏に

2010年10月28日03時52分発行